

西勝寺関連年表と同時代期

康治 二年(1143)若山莊成立 源季兼、藤原聖子(崇徳上皇后皇嘉門院)に寄進。皇嘉門院の弟：九条兼実、慈鎮和尚
兼光：日野資実：(七代)：有光：弟・秀光(有光弟)：春龍丸(養子・広橋兼郷の子)：兼郷：三条実雅：日野勝光：(不明)

応保 二年(1162)「白山之記」高峯一能登鈴モスノ白山 同佐那武一犬野庄異説入之 ノウノ白山 ※ノウノ能生

『夫木和歌抄』卷三三雜部一五(1309年頃)「自今以後之為勅撰之又此道に志あらん人之ために」
こし舟 同 仲実朝臣(1056～1112) 17387の15821 くもつよりすずめぐりするこし舟のおきかけさかるほのぼのに見ゆ

承安 五年(1175)方上保初見。須須神社文書の最古

治承 三年(1179)『梁塵秘抄』 後白河法皇撰

299大峰通るには仏法修行する僧居たり唯一人若や子守は頭をなでたまひ八大童子は身を守る

300我等が修行に出でし時珠洲の岬をかい回り打ち廻り捨てて单身越路の旅に出でて足打ちせしこそあはれなりしか
301我らが修行せし様は忍辱袈裟をば肩に掛けまた笈を負ひ衣は何時となく潮垂れて四国の辺路をぞ常に踏む

元暦 元年(1184)「慈寂 光福庵開基 大檀那 飯田城主寺領三百石 文治二年(1186)三月五日寂」 安永八年「西勝寺系譜」

文治 元年(1185) 平時忠～1189配流 小竹瑤泉寺・一ノ宮西教寺・渋田照光寺

『源平盛衰記』(1247～49)「能登の国鈴の御崎に着き給ふ。白波の打驚かす岩の上にねいらで松の幾世経ぬらん」

文治 五年(1189)二月二四日時忠没六〇歳六二歳説一五種・中院本「たうごく大たといふ所にてつゐにうせ給ひぬとぞきこえし」

元久 二年(1206)～建暦二年(1212) 八幡寺大般若経 願主若山御庄大谷住平兼基

源義経(1159～89)『源平盛衰記』 幸若舞曲『笈搜』「憂き目をば藻塩と共に掻き捨てて喜びとなるすゞの岬や」
幸若舞 嘉吉二年(1142)西園寺公名日記に同家で舞う。

建久 八年(1197)日野資実 法住寺を祈禱所とす。弘法大師774～835 『金剛峰寺建立修行縁起』『沙石集』

元仁 元年(1224)明治5年立教開宗をこの年とする。

弘安 二年(1279)石川県最古の紀年銘板碑 金剛界大日如來種子板碑 羽咋市福水町朝日山

貞和 五年(1349)日野時光、恒利名を秦左近に与えることを認める。常利文書初見。

貞治 二年(1363)～78 四坪薬師寺、大般若経書写。秦玄本・玄海・定阿など。多くの寺庵・談義所。

貞治 四年(1365)若山神社懸仏鏡板三面。

応安 五年(1372) 法住寺白山神社獅子頭 願主西願作鬼大夫

永和 二年(1376) 南黒丸八幡神社石塔

正長 元年(1428) 吼木版法華経開板(妙成寺蔵)、仁王 享徳二年(1453) 院勝
↓貞享元年(1684) 卯辰愛染院・出開帳。元禄一五年(1702) 『地藏応験新記』 養智院地蔵。

文安 六年(1449) 七月二八日宝徳元年蓮如上人北陸行(1415~89) 伝蓮能尼書写経 お文(蓮崇本蓮崇分、上人分は1413)・親鸞伝
絵(文明二年1471)

文安 六年(1449) 五月~七月 白比丘尼・八百比丘尼 『臥雲日伴録』『康富記』。一八〇箇所 出生地三一(談議家含まず)
↓男鹿能登山・日和山・龍灯・喜見城

一五世紀半ば 『小栗判官』 「能登の国とかや珠洲の岬へ買うてゆく」 五説経の一。時衆。

文明 三年(1471) 蓮如上人吉崎御坊建立 ↓一勿八幡宮~久江 野立ちの地藏

文明 一一年(1479) 一説この年創立 明治一一年 『寺院明細帳』

文明 一四年(1482) 西勝寺往昔本尊 「文明十四年辛丑三月廿五日 方便法身尊像 尊・能州太田郷飯田町 願主釋尼祐」 「御寶物
目録」 「光福庵二世祐念尼 當寺傳來画像本尊願主祐念 長船定光刀舌柄祐念ヨリ傳來 賜飯田総道場号 文龜十六(永正
一三年1516) 乙卯正月十五日」 「西勝寺系譜」

文明 一四年(1482) 六月一日 山科本願寺本尊遷座

文明 一五年(1483) 蓮如上人七十賀御短冊 右ハ越前浅水称名寺宝物なり 安永七(1777) 戊戌年九月御巡回之節存如上人大幅
六字名号卜替申□也」 「御寶物目録」

長享 二年(1488) 「光福庵主西勝寺祖入覚 改宗為念佛道場 長享二戊申年十一月十八日」 「西勝寺系譜」

延徳 二年(1490) 能登で、本願寺門徒、守護攻略を計る 『真宗聖典』 年表

延徳 三年(1491) 蓮如上人鏡の御寿像 蓮如上人六七歳 ↓※①来歴 ※②縁起

明応 三年(1494) 我なしときかはやかてもみな人ハ南無阿弥陀仏とたれもたのめよ
命なからう

八十までみてる命の老らくの月の長夜をまつや彼岸 蓮如上人八〇才
「蓮如上人御真筆」 一 御詠歌二首 一軸 右三品ハ天明甲辰のとし(天明四年1783) 泉州より請し来る」 「御寶物目録」
『蓮如上人遺文』 「〇明応元年満八十歳法印号の前記に(満八十は明応三年也あそぼしちがへらる歟) 八十地まで命ながらふ
老いの身の月の船路をまつや彼岸 我なしときかばやがてもみな人は南無阿弥陀仏とたれもたのめよ」 稲葉昌丸編

明応 八年(1499)三月二五日蓮如上人示寂 八五才

明応一〇年(1501)方便法身尊像「実如(花押) 明応十年 辛酉二月・国口門 安宅・願主 釋了口」
弘治 二年(1556) 加賀に於ける本願寺体制の確立

元龜 元年(1570) 九月一三日・石山合戦。二五日・利家、信長の命により、叡山攻撃。

元龜 三年(1572)十二月一六日 福光名河成につき、光福庵寺へ寄進の福光名田地を時国に遣す旨申渡 時国四郎三郎宛 綱連
(花押)「時国健太郎家文書」5

天正 五年(1577)九月一五日七尾城陥落

天正 八年(1580)三月講和。四月二三日尾山御坊陥落。六月山内一揆織田軍を破る。柴田勝家、鈴木出羽守を松任城で謀殺。

天正一〇年(1582)石動山・前田利家軍との戦いで再び三〇〇余坊灰燈に帰し、笹籬山に移住させられ法灯を継ぐもの七八坊。

文禄 三年(1594)十月五日(没年カ)「七世玄海 是マテ光福庵ト称シテ則一宗ノ道場タリ飯田城主綱連朝臣没落ノ後光福庵ノ号
ヲ改テ故アリテ西勝寺ト称ス」↓元龜三年「時国健太郎家文書」

文禄 三年(1594)七月、利家の妻、芳春院の信仰により、本願寺末寺(別院)を再興する許可を与える。

慶長 二年(1597)四月、本願寺教如、別院建立を命ずる。

慶長 二年(1597)七月 利家、石動山還住を許可。神宮二、坊院七二還住する。

寛永 二年(1625)「大谷本願寺釋宣如(花押)親鸞聖人御影 寛永二年乙丑曆九月五日 吉藤専光寺下能州鈴郡飯田村惣道場物也」
↑明治九年十一月二十八日 見真大師勅諭号

寛永 七年(1630)金沢城下寺院寺町へ移転

寛永一四〜一五(1637〜8)島原の乱

寛永一七年(1640)「本願寺釋宣如(花押) 寛永十七年庚辰歳重陽書之 三朝高祖真影 専光寺下能州珠洲郡 飯田町惣道場西勝寺
常住物也」

寛永一七年(1640)上宮太子真影

寛永一八年(1641)前田利常、天海による源氏姓の勧告を蹴り、菅原姓を名乗る。

寛永二〇年(1643)珠洲 高屋刀禰家の宗旨人別帳。曹洞宗本光寺九人、同千光寺二人、下人三五人真宗円龍寺。

寛永二十一年(1644)「年忌志等も仕、聴聞の為参詣仕候而法義相守り申候」〔吉利支丹御吟味帳〕

慶安 四年(1651)改作法施行 一土佐二加賀

不明 宣如上人(慶長一九・1614〜承応二年・1653)御消息 六月廿八日 宣如(花押) 能州鈴郡飯田町 廿八日講中

延宝 四年(1676)他派から転派寺院に関する取扱い規則を定める。この頃蓮如御影道中

天和 二年(1682)大谷本願寺親鸞聖人縁起四幅 一如上人代 季夏(六月)十七日

貞享 二年(1685)「貞享の書上」

元禄 五年(1692)『世間胸算用』井原西鶴 「二平太郎殿」毎年、節分の夜は、門徒寺に、定まって、平太郎殿のこと讃歎せらるるなり。聞くたびに、替わらぬ事ながら、殊勝なる義なれば、老若男女ともに参詣多し」

元禄 九年(1696)「能登はやさしや土までも…」初出 『三日月の日記』浅加久敬

元禄一五年(1702)大谷本廟上棟式。金沢『地藏菩薩応験新記』・菅公八〇〇年祭。この頃、「能登国三十三観音巡礼札所」真宗は説教、チンカイ・ドンカイ・ホラノカイ

宝永 年中(1704〜11)「光福庵ヲ改テ飯田総道場西勝寺ト号スルノ一条ハ曲ニ記シテ本尊ノ蓮座下ニ納置ケルモノ寶永年中ノ炎上ニ本尊ノ御免書并記録等一片ノ煙トナレリ惜哉故ニ今園意法師ノ反古ノ中ニアリシヲ写シオクモノナリ」〔西勝寺系譜〕

正徳 元年(1711)親鸞聖人四五〇回忌。一寺一家制の触れ

正徳 五年(1715)学寮に講師職をおく

正徳 六年(1716)『親鸞聖人御因縁秘伝鈔』刊 文和三(1354)の跋文・存覚上人、宝徳二年(1450)存如上人五五歳の折の跋文。

享保 二年(1717)「(所口)繁昌の所なり。酒屋数百餘軒、是は佐渡・松前・えぞへ酒を商売する故也。(中略)七尾大工とて上手なり。桶師も上手也。絵師二軒有、何も能く絵を書也。長谷川統養とて、昔の絵師の名残なるべし。袴屋細工・彩物細工・何にても不自由成事はなし。(中略)飴を煮る家多し。大豆飴・おこし米名物也。(中略)惣肝煎大野屋五郎右衛門と云。東町肝煎黒氏屋忠右衛門、中町肝煎上田屋長兵衛、西町肝煎富田屋与右衛門、町年寄は奈良屋源三右衛門・酒屋四郎右衛門・加藤屋彦四郎・越前屋久左衛門・菓子屋與兵衛等也。」森田盛昌『能州記行』。1999(平成11)1010新聞記事、文化一四(二八一五)『能登日記』は間違ひ。

西勝寺欄間「能州所口大工町 酒屋三郎右衛門 歳八十四作」縦七〇・五センチ横二四三センチ

享保一八年(1733)『親鸞聖人正明伝』高田派 良空 文和元・一三五四年存覚上人六三歳に仮託
享保一八年(1733)石動山、仁和寺より七ヶ国勧進往古の通りの書状。

不明・真如上人(元禄一三年・1700)延享元年(1744)御消息 三月三日 真如 専光寺下能登園 珠洲郡飯田村西勝寺
十二日 女房講中

宝曆一〇年頃(1760) 十二世圓祐弟圓空「松前箱館浄玄寺開基」
「西勝寺系譜」浄玄寺はは後の函館別院。

この頃、近松半二・上田秋成、菅原知洞・粟津義圭ら。加賀の千代(1703~175)。

本堂安永頃か

安永 六年(1777) 「御寶物目録」十二月廿八日改 飯田惣道場西勝寺律師圓旭

安永 六年(1777) 『能登名跡志』「飯田 家数三百軒計。二・七の日市あり。不殘商家繁昌也。御塩代官一人・山廻り役一人在住。十村役篠田氏也。」太田頼資 ↓安政四年絵図

安永 八年(1779) 「西勝寺系譜」
「圓意法師ノ反古ノ中ニアリシヲ写シオクモノナリ」

天明 七年(1787) 十一月十八日 乗如上人御消息 天明七年十一月十八日釋乘如(花押) 専光寺下能州 珠洲郡飯田町 西勝寺
十四日 小寄講中

天明 八年(1788) 一月三〇日京都大火・東本願寺類焼

天明 九年(1789) 『本承余艸』

寛政 二年(1790) 石動山「一山中行事大要」 泰澄靈祭 七月七日↓コンゴウ参り

寛政 六年(1794) 香月院深励第五代講師。宗学の大成者。寛政二年(1790) 擬講、同五年嗣講

享和 二年(1802) 飯田西勝寺御筆戌十一月享和二年御書之同三年亥正月十二日往生
享和 二年(1802) 歎喜光院殿御崇敬の開始。一説に「蓮如上人御影道中」開始 文化六・七(1809~10) 御崇敬中止

文化 三年 本如 宗意裁断の法話(二業惑乱終結) 宝曆(1751~1764)~
文化 四年(1807) 長太ムジナ 翌年 正月、長太ムジナ 『加賀藩史料』 同八年(1811) ムジナの法要

文政 二年(1819) 『信後相続歎喜嘆』刊行
比良地区せりお講 厨子塗出来

文政 九年(1826) 文政九年五月十六日釈達如(花押) 専光寺下西勝寺門徒 能州珠洲郡飯田浜町 本山 廿五日小寄講中

天保 五年(1834)「一、寺庵夜談議之儀(略)門徒宗之寺、祠堂經と申、院下寺ハ三十日内陣四間寺ハ二十日斗、飛簷寺十日余ツ
致候。(略)参打続、宜敷年柄ハ毎夜致参詣目ぶそく候故、昼の農業手に付ず候。一郷一郷の諸寺、田うへ付済シ濟
ぬより祠堂經相務め、一日も断間なく拾ヶ寺有ハ大概百日相続申候。五ヶ寺有里にてハ二ヶ月相続候。(略)近年ハ其
郷、其里ニより談議を夜半頃ニ致候而其まで踊せ候而(略)「御国政ニ付申上候帳冊」

天保年間(1830~44)「故七五三守」碑 鍛冶町助八の次郎の碑。顔役で力士。一時期酒屋を営んだ。「故い佐助」碑は浅田鉄次郎

(彦治)の碑。明治一九年二代目消防組頭、四四年一月一六日組頭。大正初年に中田のふかだから石を引つ張つてきて建
てた。佐野春庵が「い」と付けた。「私たちの町」昭和二三年謄写刷

弘化 四年(1847) 香樹院徳龍講師

安政 四年(1857) 「珠洲組直組飯田村家建并往来小路ニ至迄」地図

慶応 四年(1868) 神仏分離令

タブ 都万麻 『万葉集』卷第一九4159「洪谿しほたにの埼を過ぎて巖の上の樹を見し歌一首 樹の名は都万麻 磯の上のつままを

見れば根を延へて年深からし神さびにけり」 ※洪谿 高岡市洪谷

柳田国男 明治三一年夏 渥美半島先端伊良湖岬 一月に三回の椰子の実。黒潮・日本海流 常滑焼
折口信夫 昭和二年六月 四〇歳 気多の杜 四年古代研究 対馬海流・リマン海流 珠洲焼

※①来歴「○賀州小松釋良誓俗姓不詳蓮如上人吉崎ニマシマヤノシ時剃髮シテ御弟子トナレリ故ニ小松ニテ一字ノ坊舎ヲ建立シテ
上人ノ御教化ヲ演説シケルニ近郷隣村ノ道俗良誓ニ從テ念佛ヲ信スル輩甚多シ依テ上人西勝寺トイフ寺号ヲ賜ル加之良誓望ニヨ
リテ鏡ニ向カセタマヒ上人ノ御姿ヲウツサセラレ自ラ凶画ノ切オワリテ弘誓強縁等ノ文ヲ讚ニアソハサレ良誓ニ与ヘタマフ 御
添状御裏ヲ今残矣 依之良誓ヨリ祐玄祐應円誓ト小松西勝寺ニ代々安置マシ奉リテ御一流ヲ汲ミケルニ円誓住職ノ頃門徒ト不和ノ
コト出来シテ裕信ト父子トモニ寺ヲ退キ傍ラニ庵室ヲムスビ竹布ノ六字名号 良誓へ上人ヨリ賜ル 上人並ニ御自画鏡ノ御影ヲ安置
シ奉ルニ不慮ノ災害ニ遇テ庵室忽ニ一時ノ炎トナレリ然ルニ奇哉灰燼ノ中ヨリ御名号并ニ御真影ヲ取出シ奉リケルニ恙ナク渡ラセ
タマフコノ時ニアタリテ見聞ノ諸人渴仰前ニ超過セリシカルニ円誓ハ吉藤専光寺ニ由縁アルニヨリテ吉藤ニ赴キ寺務ヲ補佐ス一朝
病オコリテムナシクナリ又裕信遠劫ノ宿縁ニヤ當国へ来リ當寺第八世ノ住持トナレリコノトキ円誓ノ預ケ置奉リシ御名号御影等ヲ
専光寺ヨリ乞請来リテ光福庵ノ名ヲ改テ西勝寺ト号ス委クハ縁起ノ如シ」 「西勝寺系譜」

※②縁起「當檀ニ安置奉ルハ本願」寺中興開山蓮如上人六十七才之尊像ナリ抑ソノ一欄(濫)觴ヲ伺イ奉ルニ蓮如上人「吉崎御滯
留ノ砌リ加賀能」登越中越后信濃出羽奥州七カ国の道俗貴賤男女「ヲ論セス日夜群詣スルコト門前」市ヲナシ御化導ヲ蒙リ□(止
十矢)フモノモ□(人十口)ニ「ヲトリ誇ルモノモ情ヲヒルカヘシモロトモニ」報土往生ノ素懷ヲトケ奉ラン□(外字)喜「日夜念
佛スルハ偏ヘニ上人御化導ノ偏キカイタス処也上人ノ御勸化」蒙リ念佛オコタリナカリシカ盛者必「衰會者定離」ナラヒナシ
上人御上落」之期ニ望セラレ祐信ツラ・思ヨウ今生」ノ拝顔モ是レヤ限リ御上落之后チハ何ヲ「便リニ日ヲ送ランヤト泣キ怨メ
ハ上人ソノ心」ヲシロシメシテ自ラ鏡ニ向セラレソノ明鏡」ニ写リシ俣ヲ画書キ玉ヒ御形身ノ為メニ「御与ヘナサレシ尊像也ソレ
ヨリ祐信ヲ」シ頂キシメ喜不斜日夜此ノ尊像ヲ拝シ上人ニ御対面ノ思イヲナシ念佛スルコト」ヲコタリナカリシカ故アリテ當寺第

三世ノ「住職トナリ法齡六十一才ニシテ往生ノ素懷ヲ遂ゲシコトソレヨリ以來夕當寺ニ安」置シ奉リシ真影ナレハ吉崎ニ御化導
ノ「上人ニ御対面ノ思ヒヲナシ称名モロ」トモ謹テ拝礼」
※六十七才〓文明十三年